

「児やらい」に想う

土山 忠子

桃の蕾がふくらみ始める三月を迎える頃になると、一つの逸話を感慨深く想い起すのである。それは、「熊は仔熊を三歳まで連れ歩くが四歳の春の雪触けに穴を出るとき、こわい顔をして仔熊を囓んで、その子と別れるのを越後から会津にかけての山地では、ヤラヒといふ、親から離れた仔をヤラヒゴと呼んでいる。」⁽¹⁾という。

熊は、本能的ではあるが、わが仔をつき放して一人立ちさせることの必要と、その時期をきちんとおさえているといえよう。この姿を古い時代には「児やらい

い」と呼んだ。このことばは、「子どもを後から追い立て、突き出す」という意味があり、大人が前から引張り上げるのではなく、子どもの自発性を重んじ後から見守り応援する態度を現わしている。今日では古語として忘れ去られようとしているが、日本民族学者達の調査・研究によつて貴重な資料が集められている。大藤ゆき氏も「山口県大島では、子どもの世話に悩むことがコヤラエであった。追いまわすだけでなく、大きく成長していく子を母の手から放すことを意味している。」⁽³⁾と報告されている。

古い時代の母親は、一般的に学問もなく教育的関心も現代とは比較にならない程、低かったといえる。しかし、「子育て」という業は、日本人の生活体験の中から受け継がれてきた伝統的遺産であった。それにひきかえ、現代は過保護・過教育時代であるといわれる。生活は満ちたり、子ども数は少なく、その上、家事労働は電化されて母親はもて余した時間とエネルギーをひたすらわが子の教育に集中させる結果を招いたといえよう。このような時代にあつて「大きく成長していく子を母の手から放すこと」即ち「児やらい」こそ、今日の教育の課題ではないであらうか。

乳児期から幼児期へ、さらに児童期へと依存的存在から自立的存在へと子どもは成長の過程をたどる。昔の人達は、この成長の節にあたる所に行事を用意して

祝った。その一つである「七・五・三の祝」は、三歳、五歳、七歳とその発達段階を区切って成長を喜び、精神的に徐々に自立させようとした意図と態度がみられる。このようにして子どもは、精神的離乳を完成して成熟した大人への道を歩むのである。そのため今、子ども達の過保護な母の手からどこへ「やらう」必要があるのであろうか。

●「家」の外へ追いやろう

子どもを物理的にも精神的にも狭い密室の家から、広い外の世界へ追いやり、豊かな生活経験を与えなければならぬ。

①子ども同志の集団へ追いやろう

柳田国男氏が『子ども風土記』の中に、昔の親達は、子どもに遊戯を考案して与えるという事はなかったが、子ども同志で思い切り遊んで大きくなったことを

記している。子ども集団では、年上の子どもは年下の子どもの世話をやくことによつて、年上の子は自覚をもち、年下の子は早くその仲間に加わろうとして意欲ごんだ。また子どもの自治によつて、自分たちで色々と思いついたり考えたりして遊び方を工夫したといわれている。兄弟の少ない現代の子ども達にとつて、子ども同志のふれあひは、人間形成にとつて不可欠の経験であるといわなければならない。今日、幼稚園や保育所での混合保育や縦割保育等の異年齢集団の経験は、本来の意味での子ども集団の姿に近づけようとする配慮であるといえよう。

た時代は、遠い昔の夢になってしまったように思われる。「自然に帰れ」と叫んだルソーの思想にならつて、精巧な玩具の中にうずもれている子ども達をもう一度大自然の中へやらう必要を覚える。

大自然こそは、偉大なる教師であり、子ども達に多くの驚きや発見・感動等を肌で学ばせてくれる。大自然には生命が満ち、成長があり、変化に富み、子どもの創造性や自発性そして思考力を育んでくれるのである。狭い「家」から解放されて「子ども集団」や「大自然」にやられ育った子ども達こそ、二十一世紀の世界に向つて力強く翔いていけることを確信するのである。

②大自然の中へ追いやろう

「とんぼつりきょうはどこまでいったやら」といった自然の中での子どもの姿は、今日では見られなくなってしまった。また「玩具は野にも山にも」といっ

(引用文献)

- (1)大藤ゆき著『見やらい』岩崎美術社
- (2)山住正巳編『子育ての書』平凡社
- (3)大藤ゆき著 前掲書(1)